

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 29 日現在

機関番号：12613

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720097

研究課題名（和文） 環太平洋アメリカ文学：記憶のエステティクス

研究課題名（英文） Transpacific American Literature: An Aesthetics of Memories

研究代表者

井上 間従文（INOUE MAYUMO）

一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授

研究者番号：50511630

研究成果の概要（和文）：本研究の主要な成果は博士学位論文“Senses of History: Colonial Memories, Works of Art, and Heterogeneous Community in America’s Asia-Pacific since 1945”（南カリフォルニア大学、2012年5月）にまとめられた。この論文では、これまで表象分析的手法が主であったポストコロニアル研究に、アドルノやJ・L・ナンシーといった美学理論・感性論（エステティクス）の思想家の視座を導入し、制度化された国民主義や民族主義の「図式」を瓦解させ得る、抵抗の「共同性」への見通しを立てた。また、これまで「主流」として分類されてきたオルソンやギンズバーグ、「アジア系」または「ディアスポラ」とされてきたチャ、トリン、そして日本語表現者である清田政信などを連関させて布置することで、文学・映像において戦後太平洋を切り結ぶ関係性に光を当てた。

研究成果の概要（英文）：The result of the project has been summarized in my doctoral dissertation, “Senses of History: Colonial Memories, Works of Art, and Heterogeneous Community in America’s Asia-Pacific since 1945” which was submitted to the University of Southern California in 2012. Overall, the project attempted to critically intervene into the current frame of postcolonial studies by foregrounding the role aesthetic forms and mediations play in opening up heretofore non-existent forms of “community” that cannot be subsumed by currently existing norms governing subject formation (subjectivation). To that end, this study analyzed authors and artists who have often been classified as “Asian” or “Anglo” and sought the ways in which these authors/artists creatively and persistently resisted such terms of racialization and subjection in their efforts to instantiate a “partage” of memories.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：

トランスナショナリズム、アメリカ文学、映画・映像研究、美学理論、感性論

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降英語圏において急速に発展を遂げたポストコロニアル研究ではポスト構造主義とカルチュラル・スタディーズ双方からの影響のもとに文化的意味作用と政治権力との関係性を批判的に思考してきたといえる。しかし、こうして植民地主義的近代性を下支えする諸主体の構成と布置を文学や映像テキストから読み取る作業は、そのテキストが美的媒介物であり、感性的な経験を作動させる媒体であることへの思考を欠く傾向にあった。

一方、英語圏の人文学理論の領域においては、たとえばドゥルーズとガタリ以降ブライアン・マッスミやステイブン・シャヴィエロなどへと受け継がれて深化されたアフェクト研究や、アドルノの再評価を受けてのシエン・ガイ、レイ・テラダ、フレッド・モートンらが進めた美的経験の政治倫理的意義についての思考がこの間に重要とされてきた。ポストコロニアル研究においても同様の問題意識はたとえば Leela Ghandi の *Affective Communities*(2006) のような一部の著作に現れてきている。

本研究では1945年以降にアメリカで発表された文学および映像テキストを綿密に読解することで、(1)日本による植民地制およびアメリカの軍事覇権の記憶が文学および映像という芸術的テキストにおける媒介と形式化をなぜ必要としたのか、(2)そうしたテキストが読者／視聴者を巻き込んで構成する「共同性」なるものが、既存の国民主義や民族主義の図式にいかんして抵抗を示すのか、の二点を主に考察した。

2. 研究の目的

したがって本研究における美学理論・感性論の問いは、単純にこれまでのポストコロニアル研究に付加的に加えられる「新領域」などとして整理されるべきではない。なぜなら美学理論＝感性論を導入することにおいて、同分野がこれまで問題としてきた宗主国/植民地という二項対立的思考を問いに付しながら、「帝國的布置」そのものを考察し、批判する視座がより明確になるからである。

そこでジャン＝リュック・ナンシーによる感性論およびアドルノの『美の理論』に代表される芸術論を導入することで、環太平洋における戦争の記憶を扱う文学と映像作品が、それぞれ多様な方法歴史的記憶や経験を共感的なものとして来るべき読者・視聴者へと手渡していく過程を読み解いた。

3. 研究の方法

上記のように、現在の社会制度および学問制度において自明とされがちな人種化や主体化＝従属化の指標に抗うかたちで作家と読者たちが記憶を分有していることを示すた

めに、「アジア系」、「アングロ系」などとしてこれまで分類されて来た作家たちの共鳴点や関係性を扱うこととした。

これら差異と断絶を含む共鳴関係を具現化する関係性として、チャールズ・オルソンと清田政信という二人の詩人における「オブジェクト」という概念の重要性、アラン・ギンズバーグとトリン・T・ミンハにおける広告や商品の記述を巧みに集積したアレゴリカルな表現、テレサ・ハッキオン・チャと同時代の映画理論家(メッツ、ボードリーなど)などを取り上げた。さらには1980年代のアメリカと東アジアの関係性におけるミョンミ・キムや金時鐘における光州民衆闘争の記述にも考察を加えた。

4. 研究成果

研究成果は博士学位論文“Senses of History: Colonial Memories, Works of Art, and Heterogeneous Community in America’s Asia-Pacific since 1945”に集約的にまとめられており、今後英語圏において同論文に収録された成果を随時発表、刊行する予定である。

同博士論文では、J・L・ナンシーの「崇高」論やアドルノの『美の理論』にも依拠しながら、「アジア太平洋」を主な題材とする1945年以降の実験的文学・映画作品が、美と崇高のあいだにおいて、読者や視聴者の主体性の枠をゆるがすかたちで、歴史的経験を伝達し、想起を促していることを明らかにした。

また前述のように、これまで「主流アメリカ人」「アジア系アメリカ人」などとして、社会空間における人種化の図式に沿って分類され研究されて来た作家、詩人、映画作家たちを、摩擦と共鳴を抱えた関係性のもとに布置しなおす作業を行った。この事を通して、作家間の関係性そのものが、主体化＝従属化の再認ではなく、逆にその図式への絶え間ない抵抗であることを提示した。

また本研究は文学と映画という二つの芸術が共感的な関係性にあることを素描するものであった。つまり単に「文学」と「映像」をつなぐ学際的な研究としてではなく、視覚と聴覚が「文学」と「映像」それぞれの内部で、そして両者のあいだで未完かつ不完全な感覚として触れ合っていることを明らかにした。

また、こうした研究から派生的に生まれた成果の一部は映画論として英語と日本の学術誌に掲載された。韓国の学術誌 *Art, Critique, Theory* に掲載された“Senses of History: Singular Witnesses in Hou Hsiao-Hsien’s *Cafe Lumiere*”では Hou Hsiao-Hsien が日本の植民地制の記憶を描く際に写真、音楽、文学、映画が切り結ぶ関係

性を考察した。そして『ECCE 映像と批評』に掲載された「物語の「根源」—諏訪敦彦の『2/Duo』と『H Story』』では諏訪がアラン・レネの『ヒロシマ・モナムール』というフランス映画作品の「死後の生」を引き継ぎながら、新自由主義時代の地方都市・広島において原爆の記憶を再び創造・想起する可能性を先鋭化されていることを指摘した。

本研究の実施期間中には、国際学会にて5回の論文発表（うちパネル立案・司会含むもの2件、招へい発表1件）、国内にて学会発表2回（いずれも招へい発表）を行い、いずれも高い評価を得た。また2009年にはアメリカの映画研究学会である Society of Cinema and Media Studies の企画委員 (Planning Committee) を務め、同学会の年次国際大会の企画立案に関わった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

①井上間従文、「帝国の「ほつれた縁」、または、生政治の「孤島」たち—マシーセンとオルソンの『白鯨』論」、竹内勝徳、高橋勤編『環大西洋の想像力—越境するアメリカン・ルネサンス文学』、査読有、彩流社、321-345 頁、2013 年

②井上間従文、「石たちの「共感域」—1960年代の清田政信における「オブジェ」たちの共同性」、『Las Barcas』、査読無、2 巻、39-51 頁、2012 年

③井上間従文、「物語の「根源」—諏訪敦彦の『2/Duo』と『H Story』』、『ECCE 映像と批評』、査読無、3 巻、90-103 頁、2012 年

④井上間従文、「「パレルゴン」の横断—安谷屋正義と沖縄の風景の「創造」」、『Las Barcas』、査読無、1 巻、55-64 頁、2011 年

⑤井上間従文、「新自由主義時代における歴史の感覚：「再来」するブラック・アメリカとヒロシマ」、柿木伸之編『広島の現在と〈抵抗としての文化〉—政治、芸術、大衆文化』、査読無、54-65 頁、2011 年

⑥Mayumo Inoue, "Stones, Rocks, and Other Objects of History: Aesthetic Distributions of Memories in Theresa Hak Kyung Cha and Kiyota Masanobu." 査読無, *Nanzan Review of American Studies*. Vol. 32: 187-200, 2010 年

⑦ Mayumo Inoue, "Senses of History: Singular Witnesses in Hou Hsiao-Hsien's *Cafe Lumiere*." *Art, Critique, Theory*. 査読有, Vol.1, no. 1: 94-105, 2009 年

[学会発表] (計 7 件)

①井上間従文、「チャールズ・オルスンと戦後太平洋」(日本英文学会第83回大会) 北九州市立大学 2011年5月22日

②Mayumo Inoue, "Parergonal Aesthetics in the Age of Military Occupation." (Annual Conference of American Comparative Literature Association) カナダ・バンクーバー 2011年4月1日

③井上間従文、「新自由主義時代における歴史想起への欲求—映像/音という亡霊」(「表現のクリティカル・ポイント」) 広島市立大学 2011年2月5日

④ Mayumo Inoue, "Constellation and Intensity: Charles Olson's historiography of the post-1945 Asia Pacific (Charles Olson 2010: A Centenary Conference) イギリス・ケント 2010年11月13日

⑤Mayumo Inoue, "Stones, Rocks, and Other Objects of History: Aesthetic Distributions of Memories in Theresa Hak Kyung Cha and Kiyota Masanobu." (Nanzan American Studies Summer Seminar) 南山大学 2010年7月26日

⑥Mayumo Inoue, "Postnational Immobilities: Allegorical Histories in Charles Olson and Kiyota Masanobu." (Annual Conference of American Comparative Literature Association) アメリカ・ニューオーリンズ 2010年4月4日

⑦ Mayumo Inoue, "Hiroshima beyond the Aesthetics of Failure: History, Materialism, and the City in Suwa Nobuhiro's *H Story*." (Josai International University Media Workshop) 城西国際大学 2009年5月22日

[その他]

ホームページ等

<http://gensha.hit-u.ac.jp/staff/inoue/INOUE.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 間従文 (INOUE MAYUMO)

一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授

研究者番号：50511630